

## 教員プロフィール

---

吉川 智教(ヨシカワ トモミチ)



### 専門分野

教授

### 専門分野

イノベーション・マネジメント、産業集積論 (Industrial Cluster) 日本の生産システム

### 講義科目

企業の経済学

Economics for Business Administration I

Innovation and Production Management

イノベーション・マネジメント

Innovation Management

### 経歴

1947	東京に生まれる
1969.03	早稲田大学 理工学部 数学科 卒業
1971.03	早稲田大学大学院 商学研究科 修士課程 卒業
1973.03	一橋大学大学院 商学研究科 修士課程 卒業
1976.03	一橋大学大学院 商学研究科 博士課程 中退
1976.04	横浜市立大学 商学部 専任講師
1977.04	横浜市立大学 商学部 助教授
1978.08-12	世界銀行 経済開発研究所 客員研究員
1979.07-1981.07	スタンフォード大学大学院 ビジネス・スクール 客員研究員

1988.07- 1990.04	ブリテシュ・コロンビア大学 アジア研究所 客員教授
1990.04	横浜市立大学 商学部 教授
2003.04 ~	早稲田大学大学院 ビジネススクール 教授

## 対外活動

日本ベンチャー学会理事、日本ベンチャー学会イノベーション研究部会代表

## 研究業績一覧

日本語

[https://www.wnp7.waseda.jp/app/ip/ipi0211.html?lang\\_kbn=0&kensaku\\_no=1687](https://www.wnp7.waseda.jp/app/ip/ipi0211.html?lang_kbn=0&kensaku_no=1687)

英語

[https://www.wnp7.waseda.jp/app/ip/ipi0211.html?lang\\_kbn=1&kensaku\\_no=1687](https://www.wnp7.waseda.jp/app/ip/ipi0211.html?lang_kbn=1&kensaku_no=1687)

## 研究室 URL

<http://www.waseda.jp/sem-t.yoshikawa/>

## 主要著書一覧

〔著書〕

- 1) 共著「複雑系の経済学」ダイヤモンド社、1997年
- 2) 朝日新聞社編「経営学がわかる」; 新版 AERA MOOK「生産管理」; 二つのイノベーションが生産システムの両輪」朝日新聞社、2005年

〔論文等〕

- 3) 「研究開発型ベンチャー企業の産業クラスターと産業集積 モノ作りと新製品開発の集積の論理の違いーマーシャルとポーターの産業集積論の限界」p41 - 56、ベンチャー、レビュー、NO2, 2001年8月
- 4) 単著「産業クラスターの持続性と新産業創出のメカニズム」p47 - 56、ベンチャー、レビュー、No.4, 2003年11月
- 5) 単著「プロセス・イノベーションとしてのリーン生産システムの体系化 - イノベーション・マネジメントの視点から - 」『国際経営・システム科学研究』、36号、pp.149 - 164、2005年3月

- 6)単著「新産業創出のための地域産業クラスター - 燕・三条にみる 400 年の産業集積の持続性と産業転換のダイナミズム - 」『経済と貿易』、189 号、pp.61-75、2005 年 3 月
- 7)単著「21 世紀の産業経済の新しいパラダイム - 日本と開発途上国の新しい分業を求めて - 」『開発技術』11 号(技術開発学会)、pp.97-108、2005 年 6 月 30 日
- 8)単著「21 世紀のイノベーション・マネジメント・プロセス・イノベーションからプロダクト・イノベーションへ」『早稲田ビジネス・レビュー』2005 年 7 月、pp.87-90
- 9)単著「日本の製造業復活と MOT-いま、なぜ、日本で MOT なのか? 」『技術士』、2006 年 6 月、pp.20-23
- 10)単著「iPod で読み解く、21 世紀のイノベーションの本質 日本企業がプロダクト・イノベーションに成功するには」『早稲田ビジネス・レビュー』2007 年 11 月
- 11)"The Knowledge of actors to lead Innovation; Innovation Process in Cluster of US, Finland and Japan" (2006), [Rethinking Competitiveness Policy and Society in a Globalized Economy], Innovation Pressure International ProAct Conference, March 15-18, Tampere, Finland.
- 12)"Innovation Management and MOT Education in Japan" (2007), Conference on Global Management of Technology, Seoul National University, Korea, 26-29 March 2007.
- 13) "The Perspective from Japan-Innovation Change; from Process Innovation to Product Innovation" (2007), Conference on Japan's Role in the Emerging Asian Network Economy, Leiden University, Amsterdam, Holland, 24 May 2007.

## 研究テーマ

イノベーション発生のメカニズム

## メッセージ

(1)イノベーション・マネジメントの研究について

innovation のことを日本語でしばしば、技術革新と訳しますが、それは誤訳です。なぜならば、英語の innovation は、技術革新以外の社会的な制度の革新や、経営革新も含みます。もしも、innovation を技術革新と訳すと、技術以外の革新、例えばトヨタ生産システムなどの「経営の革新」やベンチャー企業等の「新しい企業制度」は、イノベーションの範疇に、入らないで、無視されることになります。

innovation とは社会に対する新しい価値創造です。したがって技術革新でそれが可能なこともありますが、それ以外にも「経営の革新」、「新しい社会制度」の確立などによっても可能です。innovation を如何にマネージするのが大きな研究テーマです。

## (2)イノベーションの地域偏在性

イノベーション、イノベーションといっても残念ながら、全世界で広く起こっているわけではありません。特定の地域でしか起きていないのです。

例えば、半導体に関するイノベーションの 70%がシリコンバレーで起きています。産業クラスターでイノベーションが起きることが多いのです。

それを私は、「イノベーションの地域偏在性」と呼んでいます。要するに、イノベーションは起きやすい場所では起きないということです。なぜこのような地域偏在性があるのでしょうか？この「イノベーションの地域偏在性」ということから、二つの面白いテーマが出ています。

1)企業に対する応用です。企業でどのようにして、そのような環境を作ればよいか考えます。

2)最近では、産業クラスターを政策的につくり、そこでイノベーションを起こそうとしています。その典型的な例はフィンランドに見ることができます。フィンランドは、2000 年に、18 の地域に政策的に産業クラスターを作り、イノベーションに成功しています。

特に、日本でも、文部科学省や、経済産業省、が中心となって、産業政策を具体的には、産業クラスターの育成を考えて、大学、企業の連携、を進めています。その基本的な考え方が、実は、イノベーションと産業クラスターの関連性です。

如何に、イノベーション、フレンドリーな環境を企業でも、産業クラスターでも作るのかということが、重要です。

イノベーションの発生メカニズムは、簡単に言えば、困っている顧客を探すことから始めるのです。その困っている顧客に対して、解決を提案するのが、イノベーションとすることができます。それが、顧客に対する新しい価値創造となります。

## プロジェクト研究

### イノベーション・マネジメントの研究 [MOT]